富士山世界遺産コラム　　2023年１月１日《vol. 8》

お札博士フレデリック・スタールと大頂寺石井真峯

<静岡県富士山世界遺産センター　学芸課　教授　大高　康正>

フレデリック・スタールはアメリカの人類学者で、1858年9月2日にニューヨーク州オーバーン市に生まれます。明治37年（1904）2月にアイヌ研究のため初来日、以後昭和8年（1933）8月14日に東京で亡くなるまで、16回来日しています。スタール博士の日本研究は幅広いテーマに及び、富士講のほかアイヌ、松浦武四郎、なぞなぞ、絵解き、ひな祭り、祭社の山車、河童信仰、納札、看板、達磨、碁、将棋、寒参りなどでした。特に納札に関して自分の名をもじった「寿多有」と刷られた納札（千社札）を日本各地に持ち歩いて、神社仏閣に貼って廻ったとされ、この行為がスタールが自らをお札博士と称す所以となっています。

富士山を愛したスタール博士は、自ら山頂へも5回登山していますが、静岡県小山町の須走口を拠点とし、大米谷（おおこめや）旅館を定宿としていました。こうしたことから、スタール博士と須走地区の関係は深く、須走地区には博士の死後に慰霊碑が建てられ、遺言により遺骨も埋葬されています。

あまり知られていないかも知れませんが、スタール博士と富士宮市との関係も大変深いものがあり、何度も大頂寺を訪れていました。スタール博士は大正4年（1915）10月から11月にかけて、東海道を旅していますが、その際にも大頂寺を訪れています。この行程は翌大正5年3月に『お札博士の観た東海道』として大日本図書から刊行され、富士宮訪問の様子も記されています。スタールのこの著作を日本語訳した人物が当時32歳で、後に大頂寺23世となる石井真峯でした。同書の序文に「年来の知己であり又自分の愛する一青年が道中の日記を翻訳したいと言つた」とあります。真峯は早稲田大学英文学科を卒業し渡米、ワシントン大学大学院、コロンビア大学大学院を修了し、静岡大学など多くの学校で英語教師として教鞭を執りました。仏教関係および法然上人に関する和文、英文の著作を遺しています。

スタール博士と石井家との関係は、真峯の父の石井了覚の頃に遡ります。了覚は埼玉県の生まれで、増上寺へ入り、その後富士市の医王寺へ移り、そして大頂寺を継ぎます。了覚には長男真峯の他、真峯の姉馨（かおる）がおりましたが、市川家に嫁いでいます。馨の嫁いだ市川家は夫の仕事の関係でシアトルに在住しており、その頃からアメリカ在住時のスタール博士とはつきあいがあったようです。真峯のワシントン大学への留学も馨のシアトル在住が手助けとなっていたようですが、こうした縁からスタール博士の来日時にも石井了覚をはじめとした石井家の協力があったようです。石井家には馨や真峯のアメリカ在住時の写真や、スタール博士とのやりとりを示す書簡、博士が大頂寺を訪れた際の写真が数多く遺されています。

大頂寺（富士宮市東町）

大頂寺奥座敷前のスタール博士（中央）と石井真峯（右端）（大頂寺所蔵）

〔付記〕このコラムの執筆に関して、大頂寺住持の石井孝之様に貴重なお話を拝聴し、また所蔵写真の閲覧・撮影をさせていただきました。記して感謝を申し上げます。